

魯迅「故郷」の読書史

藤井省三

藤井省三

魯迅「故郷」の読書史

— 近代中国の文学空間



創文社刊

[ふじい・しょうぞう] 1952年東京に生まれる。東京  
 大学博士課程修了。桜美林大学助教授をへて現在東京  
 大学文学部教授。専攻、近代中国文学。文学博士。  
 [著訳書]『東京外語支那語部——交流と侵略のはざま  
 で』『中国映画を読む本』(以上、朝日新聞社)『現代  
 中国の輪郭』(自由国民社)『よみがえる台湾文学——  
 日本統治期の作家と作品』(共編著・東方書店)『新し  
 い中国文学史』(共著・ミネルヴァ書房) Ch. ニュー  
 『上海』(監修・平凡社)『笑いの共和国——中国ユー  
 モア文学傑作選』(共訳・白水社)、李昂『夫殺し』  
 (宝島社) 鄭義『中国の地の底で』(監修・朝日新聞  
 社) 莫言『酒国』(岩波書店) ほか



中国学芸叢書

(4)

〔魯迅「故郷」の読書史〕

著者 藤井省三  
 発行者 久保井浩俊  
 発行所 株式会社 創文社  
 〒100 東京都千代田区麹町二一六―七  
 電話 〇三―三二六三―七一〇一(代表)

一九九七年一月二五日  
 第一刷印刷  
 一九九七年一月三〇日  
 第一刷発行

ISBN4-423-19419-8  
 Printed in Japan

精興社印刷  
 鈴木製本所

目次

はじめに——文学と〈想像の共同体〉

第一部 知識階級の「故郷」——中華民国期その1

I テクストの生産——一九二二年チリコフの翻訳

II 五・四新文化運動と新読者層

III エロシェンコの知識階級批判

IV 新聞文化欄と文芸誌の機能

V 書店網の拡大と『呐喊』の流通

第二部 教科書の中の「故郷」——中華民国期その2

I 「国文」科という制度

II 国語教科書の歴史

III 国語教室の「故郷」

三

二

一九

三〇

元

四

五

六

七

IV	「事実の文学」と「気分文学」——再生産としての批評	三三
	第三部 思想政治教育としての「故郷」——中華人民共和国期・毛沢東時代	
I	新しい聖人と「唯人民独尊」	三三
II	「語文」科の誕生と思想政治教育	三三
III	「豆腐屋小町」の階級性	三〇
IV	真犯人を探せ	二六
V	文革に追放された「故郷」	二七
	第四部 改革・開放期の「故郷」——中華人民共和国・鄧小平時代	
I	国語教育の効率化と「文・道」論争	一七
II	豆腐屋小町の名誉回復	一六
III	閩土Ⅱ犯人説の復活	三一
IV	「私」の挿し絵	三七

V	「主題思想」の復古と新種	三七
VI	上海市中学の国語教室にて	三九
結	び——「歴史的懸案」のかなたへ	二六二
	あとがき	二七五
	注	二八〇
	「故郷」関係文献一覧	二七
	「故郷」関係年表	九
	人名・団体名索引	一

魯迅「故郷」の読書史——近代中国の文学空間





## はじめに——文学と〈想像の共同体〉

一九二〇年代初頭、中華民国の首都北京にて、魯迅は同市で刊行されていた月刊総合誌『新青年』に、一篇の帰郷の物語を発表した。珠玉の短編「故郷」である。

この作品の出現は魯迅文学の成熟を示すばかりでなく、中国近代化の本格的始動のメルクマールでもあった。当時の中国では清末以来の欧化・産業化の進展により、教育・文化面での諸制度の原型がほぼ整備され一段の飛躍をめざす体制が形成されていたのだ。そして大学をはじめとする高等教育機関の近代化、学生数の急増、女子大生の登場は、彼ら新興知識階級を書き手・読み手・作り手とする新聞・雑誌の急成長を促していた。

文体も言文一致へと急速に変化している。一九一〇年代後半の『新青年』誌の提唱に始まる文学革命を経て、小学校・中学校では口語文による教科書作りが開始され、文語文作品を教える「国文」科に替わり口語文教材を教える「国語」科が登場するのも二〇年代初頭である。

「故郷」は発表二年後には単行本に収録されてさまざまな批評を呼び起こす。中学国語教科書に至っては単行本に先んじて「故郷」を教材として収録し、知識階級予備軍の情念と論理とを養って

はじめに

いく。そして一九四九年に共産党が中国を統一したのちには、「故郷」は階級闘争の視点から解釈され、社会主義の思想政治教育を担う国語教材として中学校で教えられていくのである。

「故郷」の登場以来現在に至る七〇年あまりの間に、この作品を手にした読者数はおそらく十数億という膨大な数に達することであろう。歴代の読者に対して民国期には文芸批評家と教科書編者そして国語教師が読者に解釈を提示し、人民共和国ともなれば共産党文教テクノクライトが解釈を強いてきた。これらの解釈に誘導された反発しつつ、読者たちは自らの時代状況に即した新しい読みを形成してきたのである。その意味で、「故郷」とは不断に新しく編み直されてきたテクストといえよう。

「故郷」が最初に登場した二〇年代とは、軍閥割拠と日本・欧米の侵略といういわゆる「半封建半植民地」状況を打破し、名ばかりの中華民国を国民国家たらしめようとする気運に満ちていた時代である。「故郷」は北京・上海の大都市と地方の町村、知識階級と農民・小市民との隔離を描くにもかかわらず、知識階級はこれを国民国家建設の始源の物語として解釈していた。民国が人民共和国に代わったのちには、共産党は「故郷」を社会主義建設の神話的作品として読ませている。民国・人民共和国の両時期を通じて、「故郷」は国家建設を語るイデオロギー小説であったのだ。

本書は「故郷」というテクストを不断に織りなしてきた二〇世紀中国における読書の歴史を考察するものである。それは「故郷」を軸として七〇年にわたる国家イデオロギーのパラダイムを描き

出そうとする試みでもある。言い換えるならば、これは「故郷」というテキスト生成過程に映じる近代中国文学の生産・流通・消費・再生産の物語なのである。

ところでベネディクト・アンダーソンは国民（ネーション）を「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体」と定義して、「いかに小さな国民であろうと、これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うことも、あるいはかれらについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同の聖餐のイメージが生きている」と述べている。<sup>(1)</sup>

さらにアンダーソンはナショナリズムと出版資本主義との関係を三点にまとめている。

第一に……出版によって結びつけられたこれらの読者同胞は、こうして、その世俗的で、特定で、可視的な不可視性において、国民的なものと想像される共同体の胚を形成したのである。

第二に、出版資本主義は、言語に新しい固定性を付与した。これがやがて、主観的な国民の観念にとってかくも中心的なものとなるあの古さのイメージを作り出すのに役立つことになる……

第三に、出版資本主義は、旧来の行政俗語とは別種の権力の言語を創造した。出版語が出現すれば、いくつかの方言がそれぞれの出版語に「より近い」ものであることは避けられず、そうした方言がやがて出版語の最終形態を支配することになった。

ほかにもアンダーソンは学校という規格化された制度、上級に進学するにつれ故郷を離れ中心都

市へと進んでいく「巡礼の旅」が「はっきりとした領域的輪郭をもつ想像の現実性を付与」した点をも指摘している。

また社会言語学者のイ・ヨンスクは日本の「国語」を論じて、明治日本が国民国家として自己形成し植民地帝国へと進む際に国家としての同一性を支える不可欠の役割を担って創出されたものと指摘し、アンダーソンの〈想像の共同体〉論を受けて次のように述べている。

ひとつの言語共同体の成員は、たがいに出会ったことも、話をかわしたことがなくても、みな  
が同じ「ひとつの」言語を話しているという信念をもっている。経験でいちいち確認できない  
言語の共有の意識そのものは、政治共同体と同様に、まぎれもなく歴史の産物である。そして、  
「ネーション」という政治共同体と「ひとつの言語」を話す言語共同体というふたつの想像と  
が重なり結びついたとき、そこには想像受胎によって生まれた「国語」(national language)  
という御子がくっきりと姿を現すのである。<sup>(2)</sup>

アンダーソンとイ・ヨンスクとはそれぞれ、政治共同体と言語共同体とが想像されていく歴史過程を鮮やかに解き明かしたといえよう。それでは出版とはいかにして「読者同胞」を「結びつけ」たのか。出版資本主義はいかにして「言語に新しい固定性を付与した」のか。そしていかにして特定の方言に「出版語の最終形態を支配」させるに至ったのか。「言語の共有の意識」とはいかにして「言語共同体の成員」にもたらされたのか。アンダーソンもイ・ヨンスクもその解剖のメスは、

この近代における共同体想像の核心部というべき秘儀には及んでいないと思われる。

かつて出版資本主義において文学、とりわけ小説が重要な地位を占めていたことはアンダーソンも指摘するところである。そして「故郷」が二〇年代中国に登場するやたちまち經典化されたのは、すでに述べた通りである。「故郷」の読書史の探求とは、このような共同体想像の秘儀を解き明かす鍵となり得るのではあるまいか。

日本でも「故郷」は一九二七（昭和二）年に初めて翻訳されて以来、外国文学としては破格の数の読者を得ている。これを最初に中学国語教科書に収録したのは、敗戦後の日本が独立を回復して間もない一九五三年のこと、教育出版社版の三年生用教科書であった。その後、「故郷」を収める教科書は増え続け、日中国交回復の一九七二年以後は、国語教科書のすべてに収録されている。外国文学でありながら国民文学的扱いを受けているのである。

この国交回復以来四半世紀を経て現在の日中両国は政治経済の分野において深い関係を有するに至り、そのいっぽうで摩擦も増加している。日本においても深く長い読書の歴史を有する魯迅の「故郷」をめぐる研究が、日本人の中国ナショナルリズムへの理解、そして日中関係への理解にささやかながらも貢献できることを私は希望している。文学がかつて国民国家想像の核心部に位置していたとするならば、文学には日中間の新しい国家関係を想像させていく力もあろうと信じるから

である。私は本書を以て、日中国交回復二五周年のささやかな記念としたい。

一九九七年九月二十九日

藤井省三

〔追記〕引用に際して途中の一部を省略するばあいは点線二字分「……」で、引用文自体の中略は点線三字分「……」で示した。引用文中で言葉を補い、あるいは注釈を付すばあいは「」でこれを示した。「故郷」関係の文献に関する注は、その発行年月に従い例えば（七八・二b）と打った。これは文献目録一九七八年二月に配されたa b c……の中の文献bを指している。中国の雑誌は原則として発行年月を記すが、発行当年の号数を示すばあいも時に混在していると思う。中国の関連する図書館の利用には少なからぬ困難があり、統一表示のための総合的な再調査を行わなかった点は諒とされたい。

# 第一部

## 知識階級の「故郷」

—— 中華民国期その1 ——





I テクストの生産——一九二二年チリコフの翻訳

魯迅が「故郷」を書いたのは、満四〇歳を迎える年の一九二一年一月のことである。この珠玉の短編はその年の雑誌『新青年』五月号に発表された。

二〇年ぶりに帰郷した「私」は、記憶の中の美しい故郷が今や寂寞の里に変わっているのを見て胸が切なくなる。語り手である「私」自身も、没落して家のために屋敷を処分し母や甥を彼が暮らしを立てている異郷の街へと迎え、故郷に永久の別れを告げるために帰ってきたのだ。「私」の前には幼友達で今や貧困のためでくの坊のようになった農民閩土ルントウと、若い頃の淑やかさから一変して厚かましきの固まりとなった中年婦人の「豆腐屋小町」こと楊二嫂ヤンアルサオとが前後して現れる。「私」は老母と相談して不用な品は閩土にあげることに決め、閩土も畑の肥料用にかまどのわら灰を望む。ところが灰の中に茶碗や皿が隠されているのが見つかり、楊二嫂の推理で犯人に閩土が評定された、と「私」は離郷後の船中で老母から聞かされる。彼の寂寞感には「希望とは本来有るとも言えぬし無いとも言えぬ。これはちょうど地上の道のようなだ。実は地上には元来道は無いが、歩く人が多くなると、道ができるのだ」という作品末尾の有名な希望の論理の一節へと導かれる——以上が「故